

台湾の水インフラに 大きな影響を与えた

日本人



よしむら かずなり
吉村 和就

(グローバルウォータージャパン代表
国連テクニカルアドバイザー)

台湾の近代化に貢献した代表的な日本人の筆頭として、まず後藤新平を挙げておきたい。後藤が台湾総督府の民政長官として台湾に赴任していた八年八か月あまりの間に台湾の社会制度やインフラの整備が大きく進展したからである。

台湾インフラの父……後藤新平

総督府民政長官として彼の残した業績は多岐にわたるが、インフラ整備面で見れば、まず鉄道や港湾、道路など交通網の整備を挙げることができる。その代表的なものとしては、縦貫鉄道の敷設、基隆港の国際商業港としての再整備などがある。さらに、旧台湾総督府官邸などに代表されるような、スケールの大きな建造物の建設も、その多くは後藤の発案で進められたものである。医学学校出身の後藤は「生物学の原理」を重要視し、①物事をなすためには徹底的に観察せよ。②社会の慣習や制度は、生物と同じで、それ相当の理由と必要性から発生したものであり、無理に変更してはならない。具体的には「台湾の近代化には、日本の基準を当ては

めてはいけない、現地を徹底的に観察・調査し、現地に合った統治をすべき」と主張し「日本の基準で台湾を統治することは、タイの目をヒラメに移植すると同じように不自然」であると
の信念を持っていた。

「大風呂敷」とあだ名された後藤新平

若い頃に訪れた欧米諸都市の都市計画の手法や巨大建築に傾倒していたことや、彼のある種誇大妄想的な性格も手伝ってか、後藤は民政長官在任中、当時の台湾の都市部で、オーバースペックとも言えるような都市計画に基づくインフラ整備を次々に進めていった。当時台北市では片道三車線、幅員四十メートルの道路が四本も建設されたし、市の中心部にはその豪華さから「台湾の阿房宮（秦の始皇帝が建てた大宮殿・西安市に遺跡）」と揶揄された台湾総督官邸や博物館などの近代建築物が次々と作られ、さらに日本の諸都市に先んじて大規模な上水道や下水道の整備も進められた。医学学校（須賀川医学学校から愛知県医学学校（現在の名古屋大学・医学部）に進学）で学んだ後藤にしてみれば、台湾は高温多湿の気候で衛生状態が極端に悪く台湾全土で水による伝染病（ペスト、コレラ、赤痢など）や風土病、マラリア病が蔓延していた状態を一刻も早く改善したかったのである。

本誌（カレント二〇一三年五月号、第825号）で外交評論家の加瀬英明氏は「台湾の土壌と文化」で、米国の紀行作家ハリー・フランクの著書の内容を紹介している。中国から台湾に直航して、タイホクをはじめとする市街が「あまりにも清潔」で「整然としている」、「台湾人が住んでいる区域ですら、中国の街のような、堪えられない不潔さがない、ニューヨークの住宅街よりも、清潔だ」と。

ハリー・フランクが指摘しているように、一九二〇年当時の台北市は内地も含め当時の日本

で最も衛生的なインフラ整備が進んだ都市であった。

建設当初はオーバースペックとも思え、それ故に、時に痛烈な批判の対象ともなった後藤が推進した公共インフラだが、その規模の大きさから結果的には往時に比べてはるかに増大した現代の社会需要にも十分耐えうるものであった。後藤が陣頭指揮したインフラの整備、その多くが形を変えこそすれ、今日でも台湾社会で十分に機能しており、台北市をはじめとする台湾の諸都市を形成する骨格にもなっている。

水利事業は八田与一

日本統治時代、台湾の主要産業は農業（稲作、サトウキビ、キャッサバなど）であり、水利施設の拡充は台湾経済の発展に重要な地位を占めていた。地籍登録事業により台湾の耕地面積を確定させた後、水利事業を推進した。一九〇一年、総督府は『台湾公共埤圳規則』を公布、以前からの水利施設を改修すると共に、新たに近代的な水利施設を建設することをその方針とした。これら水利事業の整備は台湾の農業に大きな影響を与え、農民の収入を増加させるとともに、総督府の農業関連歳入の大幅増加を実現している。

嘉南大圳（かなんたいしゅう）

台湾南部に広がる嘉南平原は大河川が存在しない上に降水量が乏しい地域であり、秋から冬にかけては荒涼とした荒野になっていた。総督府技師の八田与一は十年の歳月を費やし、当時東南アジアで最大の烏山頭ダム（うさんとうダム、約一・五億トン貯留）を完成させた。また米国のフーバー・ダムが完成（一九三六年）するまで世界最大のダムでもあった。さらに八田は一九二〇年には嘉南大圳建設に着工、一九三四年に主要部分が完成すると嘉南平原への灌漑

用水の供給を開始し、台湾耕地面積の一四%にも及ぶ広大な新農地を創出している。

八田の生い立ちと台湾へ

八田 與一（現在の字体では八田与一、はった・よいち、一八八六年二月二十一日―一九四二年五月八日）は、日本の水利技術者。日本統治時代の台湾で、農業水利事業に大きな貢献をした人物として知られる。八田は石川県河北郡花園村（現在の金沢市今町）出身。一九一〇年（明治四十三年）に東京帝国大学工学部土木科を卒業後、台湾総督府内務局土木課の技手として就職した。台湾では初代民政長官であった後藤新平により、マラリヤなどの伝染病予防対策が重点的に採られ、八田も当初は衛生事業に従事し、嘉義市・台南市・高雄市などの各都市の上下水道の整備を担当した。その後、発電・灌漑事業の部門に移った。八田は二十八歳で当時着工中であった桃園大圳の水利工事を一任されたが、これを見事成功させ、高い評価を受けた。当時の台湾はまさにインフラ建設の真っただなかで、若い技術者にはおおいに腕のふるいがいる。ある舞台であった。八田与一の功績は台湾の教科書にも掲載され、彼の命日である五月八日には毎年、台湾の人々による盛大な慰霊祭が行われ日本人の功績をたたえている。このように台湾人で八田与一を知る人は非常に多くいるが、以前は八田を知る日本人は、台湾関係者か土木技術者・水道関係者ぐらいしかなかった。最近になり、日本の台湾旅行ガイドブックにも八田与一の功績が紹介され、若い日本人観光客も増えている。

水道事業は浜野弥四郎

一八九五年、日本が領有した当時の台湾はベスト、マラリア、コレラなどの風土病がつねに猖獗を極め、そのため島民の平均寿命はわずか四十歳程度だった。

それゆえ台湾は海外から「首狩り族と病魔が潜んでいて、人が住めない島」と恐れられていた。

島内の武力反抗族の平定のため上陸した日本軍は五千人に近い死者を出したが、そのうち戦死者はわずか百六十人ほどで、四千六百人は風土病に罹った戦病死者だったと言われている。

かくして衛生環境の改善を統治政策の要の一つとした台湾総督府は上下水道建設のため、一八九六年に東京帝大の英国人教師ウイリアム・バルトンに衛生工事顧問として招聘したが、その助手として同行したのが教え子の浜野弥四郎だった。浜野弥四郎は千葉県佐倉市出身で台湾総督府に奉職し、水道施設を始め衛生施設の計画と建設に尽力した。

浜野は滞在三年目でマリリアに罹って東京へ戻ったバルトンの任を継ぎ、一九一八年に離台するまでの二十三年間で、当時はまだ東京にも見られなかった先進的な貯水池、上下水道の敷設を精力的に実施、基隆、台北、台中、台南などの主要都市で浄水場や下水処理を完成させたのだった。

台湾の台南県山上郷にある「台南水道」（一九二二年竣工）は浜野弥四郎氏の計画・設計と施工監理による、当時の最新技術である急速濾過法を採用した大規模な浄水場である。「台南水道」（現在の山上浄水場）が出来上がったことで、当時台南市民を悩ませていた飲用水不足の問題は一気に解決を見た。このように、浜野の水道インフラの建設は台湾を「人が住める島」に変えたばかりか、「近代化の島」へと変貌させて行く上で大きな役割を果たしたのである。

復元された浜野弥四郎の胸像

こうした歴史的功績は、日本人は忘れてしまったが、しかし台湾人は忘れていなかった。奇

美実業の許文龍董事長は二〇〇五年、山上浄水場に残る浜野の胸像の台座（胸像は戦時中供出された）の上に新たな浜野の胸像を建立した。

またその年、「台南水道」は「台湾の国定古蹟」となるなど、その歴史的意義が大きくクロージアップされている。

二〇一〇年、台南市と台南県が合併し、直轄市（政令指定都市）としての台南市が誕生した。その台南市長の選挙で当選した頼清徳氏（民進黨）は選挙期間中、「台南水道」を訪れ、「日本統治時代の台湾の近代化を物語る重要な歴史的な建造物であり、台南及び台湾の発展史上極めて深い意義を持っている。もし私が当選したら、ここを整備して景観ポイントとし、文化観光事業を推進して、台南の誇りとして再興したい」と述べ、世界遺産への登録申請を行う考えまです示していた。

共通の価値観を持つ台湾

台南市は隣の高雄市に比べると日本での知名度はいまひとつだったが、直轄市への昇格で日本との交流機会が増えている。頼市長が約束したように二〇一一年にオープンした八田与一記念公園は重要な観光資源になり日本の国会議員や学術関係者、自治体からの視察団が毎月のように訪れ、頼清徳市長は先頭に立ち、台南市のPRに努めている。一三年四月十一日、東京都水道局の増子敦局長が訪れた際も、頼市長は東日本大震災での友情や、四月に結ばれた日台の漁業協定に触れ、台湾と日本の友好関係を強調している。多くの人々が台湾と日本との政治的な結びつきを述べているが、水インフラの観点から見ても、歴史的なつながりを大事にする共通の価値観を有する国は、台湾であることが理解できる。